

2023 年度 事業報告

(2023 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日)

2023 年度は、まだ不完全ながらも社会活動や経済環境、また教育の面でも、コロナ禍以前の状態をようやく取り戻しつつある 1 年でした。学校の先生や保育者の皆さんを取り巻く環境は以前にも増して厳しいものがあり、それらが論文応募数の低下という形で現れて来ていますが、一方でコロナ禍前のように、実際に全国各地の小中学校や園を訪問し、全国大会・発表会を開催することが出来、またそうした場に全国の先生や保育者の皆さんにお集まりいただき、加えて論文贈呈式も以前のような形式で復活させることが出来た 1 年でした。

加えて、ものづくり教室を中心とした公 2 事業は、以前にも増して強力に実行することが出来、懸案だった収支相償問題も解決することが出来ました。

【公 1】 科学教育を中心とし、幼児および児童生徒の豊かな人間性の確立と創造性の育成を目指す事業

1. 幼児教育

(1) 「幼児教育支援プログラム」 (保育実践論文)

2022 年度に 20 周年を迎え、過去最高の 162 園の応募を記録した「保育実践論文」は、2023 年度、前年より 41 件少ない 121 件の応募となりました。応募数は減るものの、保育現場は「行政による公立園の廃園・統廃合・民営化」「幼稚園・保育所のこども園化」「園児数の減少」「園児ピーク時に作られた園の世代交代と老朽化」などさまざまな問題を抱えており、論文審査委員の先生方より、「100 件以上をキープできたことには評価できる」とのお言葉をいただいています。

論文審査（選考）においては、すべての最上位候補園を実際に訪問し、現地調査を行いました。結果、最優秀園には、11 年連続で論文に応募し念願を叶えた「中沢学園 みなみ若葉こども園（福島県）」と、実体のない“宇宙”にのめりこむ子どもと先生の様子を記録した「国立大学法人福井大学教育学部附属幼稚園（福井県）」が選ばれました。また、アートと工夫された保育環境を「科学する心」と結び付けた「学校法人岡崎学園 荒尾第一幼稚園（熊本県）」が「優秀園 審査員特別賞」に選ばれました。審査委員特別賞が選出されるのは 2 年ぶりです。

(2) 入選園による集合形式での「実践発表会」・「科学する心を育てる」Gathering 開催

2023 年度の最優秀園による「実践発表会」を、6 月 24 日（土）に「奈良市立伏見こども園（奈良県）」と 11 月 2 日（土）に「白梅学園大学付属白梅幼稚園（東京都）」にて開催しました。「実践発表会」は、すぐれた実践を広く保育・教育関係者にご紹介するもので、公開保育、研究代表による研究発表、保育者同士のグループ協議、講師による講評と記念講演が執り行われます。奈良市立伏見こども園の発表会では当日、地域や保護者が制作した横断幕が掲げられ、小さい園にもかかわらず、全国から 350 名もの参加者が集まりました（記念講演等は近隣の小学校をお借りしました）。また、久しぶりに東京開催となった白梅幼稚園には、東京都の小平市長をはじめとする行政関係者に加え、北海道から九州まで、全国各地の保育者が、優れた実践を見に参集されました。

さらに新たな試みとして、「優秀園」の先生方のご協力のもと、「科学する心を育てる」Gathering（ギャザリング）と称したイベントを 3 回（1 回はオンライン）開催しました。Gathering には人と人が集い集まるという意味がありますが、異なる園から参加し、はじめて会った保育者同士が、自園の子どもの姿、園庭環境などについて語り合いながら、明日の保育に活かす新たな視点を得る機会にいただきました。3 回合わせて、330 名以上の保育者が参加しました。

2. 子ども科学教育

(1) 「子ども科学教育プログラム」(教育実践論文/未来へつなぐ計画)

従来から募集してきた「教育実践論文」については応募数が68校となり、残念ながら、2022年度から33校減少しました。新型コロナの影響による授業実践の減少や、働き方改革に伴う教員の勤務時間の削減など複合的な要因があり、応募数の回復は長期的な課題になりそうです。審査委員による厳正な審査の結果、最優秀校には刈谷市立刈谷南中学校(愛知県)と福島市立三河台小学校(福島県)がそれぞれ選ばれました。そのほか、優秀校として11校、奨励校に33校が選ばれました。

また、3年目となる教員個人を対象とした「未来へつなぐ教育計画(旧教育実践計画)」には、全国から45名の先生方から応募いただき、前年度から13名の増加となりました。厳正な審査の結果、12名の方が入選に選ばれ、計画を実行するための助成を行っています。

(2) 最優秀校による「子ども科学教育研究全国大会」の開催

2022年度最優秀賞受賞校による「子ども科学教育研究全国大会」は、2023年10月27日に富士見町立富士見中学校(長野県)において、2023年12月2日には横浜市立白幡小学校(神奈川県)においてそれぞれ開催しました。両校とも数多くの授業を公開し、子どもたちが主体性を持って学ぶ姿が見られました。また、会場校以外の多くの教員が授業や研究会、ポスターセッションに積極的に参加し、先生方自身の「主体的で対話的な深い学び」の場とすることができました。

【公2】 科学教育を中心として豊かな人間性の確立と創造性の育成を目指す児童生徒対象の体験活動事業

1. 科学の泉－子ども夢教室

ノーベル化学賞を受賞した白川英樹博士が塾長である「科学の泉」は、『自然を学ぶ』をテーマとする活動で、2023年度の開催は見送りとなりました。一方、卒塾生が中心となって企画をした「交流会」は、目黒区大岡山の東京工業大学で開催し、72名(オンラインでの参加者7名を含む)が集いました。当日は益一哉学長も白川先生にご挨拶に見えて、由緒ある講義棟をお貸出し頂きました。白川先生からは「自然科学の化学分野で解決を迫られている研究課題」に関する講義が行われました。その中では、世界的な人口問題に伴って化石燃料の大量消費と枯渇、気候変動、貧富の格差の広がりについての問題について触れられました。卒塾生からは、技術の進化を進める上での課題、国家と企業が担う研究における役割の差異について質問が寄せられ、それぞれの進路で活躍している様子を垣間見ることが出来ました。

2. ソニー教育財団が主催する「ものづくり教室」

課題であった公益財団法人の財務3原則の一つである収支相償を改善する目途が立ち、「ものづくり基金」の収益を上回る活動を幅広く展開しました。

(1) 全国のソニーグループの事業所が開催する「ものづくり教室」への助成

本活動は、ソニー教育財団が開催に関わる費用(キット、材料、会場費等)を助成して、ソニーグループの事業所が主体となった「ものづくり教室」を実施するものです。今年度は、地域から開催希望が寄せられる機会も増えて、合計39回、850名の子どもたちが参加して、ペットボトルを使ったヘッドホン、ICレコーダー、紙コップを使ったスピーカー等の工作を学びました。また、ソニー・太陽株式会社やソニーグローバルマニュファクチャリング&オペレーションズ株式会社のスタッフが講師としてのノウハウを教え、より多くの社員が講師となる体制作りへの支援も行いました。

(2) ソニー教育財団が主催する「ものづくり教室」の体制構築

「ものづくり教室」を安定的、継続的に開催することを目的として、ソニー教育財団が主催となって進める活動です。今年度は講師としても実績のある、ソニー・太陽株式会社(大分県)に協力をお願いしました。また、都内を始

めとする近郊での開催については、ソニー希望・光株式会社（東京都）の社員が、講師育成講座を経て実施に参画しています。その結果、東京都、埼玉県、千葉県、長野県、静岡県、大阪府、高知県の科学館や公共施設等において、財団の理念に賛同する組織や団体様と協力しながら、合計 21 回の教室を開催して、350 名の子どもたちが参加しました。この活動では障がいがある社員も運営に関わっており、子どもたちには、障がいのあるなしに関係なく、ものづくりの楽しさを感じ、興味を深め、また多様性について理解するきっかけとなりました。

(3) 高校生のエンジニア体験「aibo が高校にやってくる！」（オンライン・対面のハイブリッド）

公募で選ばれた 4 校 16 名の生徒が「自立型エンタテインメントロボット“aibo”」を使い、ソニーグループの社員からオンラインと対面で助言を受けながら、アプリケーションを企画制作し、商品開発のプロセスを体験するものです。例年 3 か月程の体験期間を今年は 10 日間に短縮して、プログラミングの経験が少ない生徒でも参加しやすい方法に変更しました。事前にサンプルコードの提供を行い、商品企画で最も重要なプロセスである「要件を整理すること」にも注力して、「ユーザーにどのような価値を提供したいか」を話し合い、考えを深める時間も設けました。そして、生徒自身の思いや実現したいことをチーム内で集約して、タブレットのアプリケーションを使いながら aibo の動きを作りました。発表会ではデモを含めて披露し、開発に必要なクラウドサービスの提供を頂いた AWS（アマゾンウェブサービス）のトップエンジニア、ソニーグループの社友である島田啓一郎氏、ソニーグループの商品企画・設計に携わる社員からも講評を受けて、交流を深めることができました。

(4) 「ものづくり教室」の新コンテンツ開発（マイクロホン）

「ものづくり教室」を拡充する方策の 1 つとして、新コンテンツである「マイクロホン工作キット」を、ソニー・太陽株式会社と共同開発しました。これは現行の「紙コップスピーカー」の教材を応用したもので、ソニー・太陽が得意としているプロフェッショナル用のマイクロホン設計・製造を手掛けるエンジニアが中心となって考案しました。この教材を使うことによって音の原理や法則への学びを深めるだけでなく、小学校高学年、中学生の生徒にも参加してもらえる教室の検討を進める予定です。

(5) 学校向けのものづくり教室

PBL 型のものづくりの授業として、南部町立南部小学校（青森県）と埼玉大学教育学部附属小学校（埼玉県）のそれぞれにおいて「夢のゲーム機をつくる」を、うるま市立南原小学校（沖縄県）では「楽器をつくる」を行い、子どもたちから豊かな発想で個性あふれる作品が発表されました。実施した教員からも「ものづくりや発表活動を通して、お互いの良さを認め合い、絆を深める姿にも繋がった」と評価いただきました。

また、ソニーの事業所でのライン編成効率改善の研修をベースとした「量産モノづくりの世界」は、小・中学校の教員を対象として全国で 4 回実施し、新たに生徒向けのトライアルを愛知工業大学名電高等学校でも開催しました。QCD の 3 要素を意識しつつ、既成概念を打ち破ることで飛躍的な生産効率の改善ができることを体験する機会となりました。

【公 3】 科学教育を中心とした教員の質的向上を目指す研究・研修等諸活動を支援する事業

1. 幼児教育

(1) 保育者・教員組織「乳幼児のための“科学する心”ネットワーク」の拡充

2020 年 6 月に発足した保育者・教員および保育者・教員を目指す学生が対象の会員組織「乳幼児のための“科学する心”ネットワーク」は、2023 年度 4 月に 847 名だった会員数が、年度末の 3 月には 1,082 名となり、1,000 人の大台を超えました。組織のさらなる拡充と会員になることへのメリットを増やすため、2 つの新たな施策を行いました。

◇「保育レポーター」（交通費助成）制度

他園の保育を見合う研修の機会がほとんどない保育者に、優れた保育実践を見て保育を考えるきっかけにし

ていただくため、財団が主催する発表会・公開保育等に参加するための交通費を、上限 1 万円まで補助する制度です。参加者には「保育レポーター」として、特に印象に残ったこと、自園で取り入れてみたいことを報告書にまとめていただきます。2023 年度には 40 名以上の保育者が利用し、レポーター同士の親睦も深めています。

◇ネットワーク会員がはじめてリアルに集まる「夏 Fesss！（フェス）」開催

7 月 29 日（土）、ソニーグループ本社を会場に、約 100 名のネットワーク会員がリアルに集合する「夏 Fesss！（フェス）」を開催しました。「夏 Fesss」とは、「夏 Fes（フェス）+ Sony Education Foundation（ソニー教育財団）+ Scientific Mindset（科学する心）」からとった略語で、当日は、保育界でも人気の高い大友剛さんによる音楽や絵本の読み聞かせパフォーマンス、「科学する心」の保育について語るトークセッション、会員の自主的な学び合いである「サークル活動」の屋台村形式での発表を行いました。「出会いがあり、語り合う場があるからこそ次につながるエネルギーになりました」「明日からの保育、頑張れそうです」など嬉しい声が寄せられました。

（2）外部保育研修団体（ぐうたら村）とのコラボレーション企画 保育実践ゼミナール

「やってみよう！ 科学する心 × いのち真ん中社会の保育実践」第 2 期開催

地球に暮らす私たちにとってこれから求められる未来の保育とは何か、その中で未来を生きる子どもたちの「科学する心」をどのように育てていくのかについて考えることを目的に、2022 年から保育研修団体「ぐうたら村」とともに、ゼミナール形式で開講している「保育実践ゼミナール」の第 2 期を開催しました。

全 4 回の開催で、約 9 か月間、保育者が自ら課題を抽出して園に持ち帰り、実践したことを持ち寄りながら保育を深めていく「往還型」の実習で、ネットワーク会員から募集・選考で選ばれた 9 名が参加しました。今年度は 4 回のうち 2 回を自然豊かな「ぐうたら村」開催とし、それぞれ 1 泊 2 日、森を歩き、畑仕事をし、食事を作ったりしながら、命や自然の循環について体感していただきました。最終発表会は、参加者の園の関係者のみならず、はじめて広く聴講者を募りました。地球規模の問題が山積する中で、子どもたちの未来のために保育実践者ができることは何か、そのような意識をもって保育をするということはどういうことなのかを、ゼミ生の発表を通じ、発信することが出来ました。

（3）「科学する心」で考えるソニー教育財団独自の“幼保小連携”の提言「つながるまなざし研究会」

学習院大学の秋田喜代美先生、武蔵野大学の箕輪潤子先生、東海大学の齋來生志子先生を中心に、現役の 4 人の教員・保育者とともに 2022 年度に発足した「幼保小連携プロジェクト」は、メンバーによりその名称を「つながるまなざし研究会」と改められ、活動を継続しています。

2022 年度の小学校の先生が園の論文を、園の先生が学校の論文を読み合い、徹底的に議論し合う「研究フェーズ」を終え、2023 年度は本研究の検証と普及に向けた「準備フェーズ」となりました。5 月には、幼保小の保育者・教員がどのように対話を深めていくべきかを学ぶため、メンバーで宮城県の 2 園を訪問しました。また、7 月にはソニー教育財団が主催「保育者のための夏 Fesss！（フェス）」に「つながるまなざし研究会」のブースを設置し、保育者の幼保小連携についての考えや懸念などのヒアリングを行いました。11 月には全国小学校理科研究協議会研究大会 神奈川大会の会場校（横浜市立立野小学校）で「幼保小連携勉強会」を開催し、小学校の先生方に幼児教育の実践などを見ていただきました。2 月には福島大学附属小学校で「つながるまなざし Cafe」と称した、幼保小の保育者・教員がカジュアルに語り合うイベントを実施しています。こうした活動を今後全国に広めていくため、ウェブサイトやリーフレットの制作も行いました。2023 年度に開催したイベントはいずれも参加者の満足度が高く、本活動に賛同するメンバーも増えています。

行政による幼保小連携の枠組みやカリキュラムの整備とは異なる、子どもの「科学する心」を見つめる「幼保小連携」のまったく新しい形として、2024 年度は本活動を本格化させる予定です。

2. 子ども科学教育

小中学校教員の支援

財団理念に賛同した教員の任意団体組織「ソニー科学教育研究会（SSTA）」への活動支援を中心に、小中学校の教員に対する支援を行っています。

（1）第2期ミライティーチャーズアカデミー（旧 SSTA トップリーダー育成研修会）

子どもたちが活躍する未来社会を想定し、そのために今、必要な教育を考え、実践に移すことを求める教育界のリーダー養成を目指す新たな研修会です。2023年6月に開講し、公募により集まった23名の教員が6チームに分かれ、6月のチームビルディングや意味付けのワークショップをかわきりに、教育界や実業界などの有識者の講演や勉強会を通じて未来社会への見識を広め、高い視点をもってこれからの教育を議論しています。その後、12月にはテーマ発表会を行い、最終の成果発表会は24年8月を予定しています。

（2）SSTAエリア研修会／支部研修会

エリア研修会は SSTA の授業研究の最上位の活動で、全国を6つのエリアに分けて、集合とオンラインを組み合わせたハイブリッド形式での発表・意見交換を中心に、都道府県を超えた先生方の交流により研究を深める大規模でオリジナルの研修会です。「科学が好きな子どもを育てる」と「問題解決学習」を共通テーマにして2022年後半よりスタートをし、2023年7月から8月にかけて6エリアそれぞれで成果を報告するイベントを行い、12月にはオンラインでの全国成果発表会が行われました。他地域の先生と大きなテーマで議論を進めることにより、新たなつながりと深い学びが生まれています。

SSTA 傘下にある40余りの支部が独自に行う支部研修会への支援もしています。例えば「地層のはざとり標本作成」など支部同士での連携したものや、若手向けに特化した研修会も行われています。子どもたちが好奇心を高め、学びを深めることができる授業の研究を中心に様々な活動を行い、授業力のレベルアップや学級運営力の向上が図られています。

以 上